ドナティスト教会成立の背景

——教会分裂の原因としての traditor 問題の当否——

丸山　了

はじめに
1．研究史
2．穏健派と厳格派の対立
3．分裂原因論としての traditor 問題の実際
おわりに

はじめに

ローマ帝国とは何かという根源的な問いに答えるために、帝国支配のあり方に目を向けることは、一つの手段として有効である。その際「中心」と「周辺」の関係、すなわちローマと属州の関係を考察するためにも、属州研究は不可欠であろう。しかし近年のポスト＝コロニアリズムの視点から見れば、属州研究には様々な障壁が立ち塞がっている[1]。特に研究対象の属州が近代において西欧諸国によって植民地化された場合、それは一層顕著となる。というのも、植民地化された地域を対象とした属州研究に尽力したのは、他ならぬ植民地を有した国々であり、その結果、かかる研究は植民地主義的歴史観によって歪められている場合が少なくないからである。こうした歪みを修正することで、従来とは異なる視座を獲得することは、ローマ帝国の実態を説明するためには必要な作業であると思われる。

本稿の対象である北アフリカ、いわゆるマグリブ地方も上記とは無縁でない。ローマ期の北アフリカをめぐる諸研究は、以前に当該地域を植民地支配下に置いたフランスや、同様に植民地を有したイギリス等西欧諸国を中心になされてきたため、植民地主義的歴史観の影響から完全には脱していない。本稿において北アフリカを対象にする理由はここにある。

さて、ローマ帝国を一つの構造物たらしめるものが存在しようがしまいが、基本的にローマ帝国とは様々な構造物の塊であり、ハイブリッドな世界であったが[2]、本稿の対象である北アフリカもその例外ではなかった。例えば人種の面では、「ローマ人」の入植以前からポエニ人、ベルベル人が混血しながら存在し[3]、宗教面ではフェニキア起源のバアル＝ハモン、タニット両神が土着の神々と同一視され、ローマ時代にもサトゥルヌス神、ユノ＝カエレスティス神としてその命脈を保つ一方、ユダヤ教徒、キリスト教徒、マニ教徒なども存在した。

本稿では北アフリカを構成する様々な要素の中から、4 世紀に北アフリカにおいて誕生したキリスト教の教会、ドナティスト教会を中心に扱う。というのも当該時期においてキリスト教の勢力はもはや無視できないものであるにもかかわらず[4]、従来のドナティスト研究は、根本的なところで植民地主義的歴史観に基づいているように思われるからである。ドナティスト教会とは、ディオクレティアヌス治世におけるキリスト教徒に対する大迫害によって生じた traditor（聖書を官憲に引き渡した者）の扱いをめぐり、おそらく 307 年ないし 308 年に成立した、カトリック教会と一線を画した教会である[5]。ドナティストという名前は、カリスマ的指導者であったドナトゥスに因む。

両教会は多くの類似点を有していた。アウグスティヌスも認めるように、ドナティストの教会制度や、儀式のあり方などはカトリックとほとんど変わらないものであった[6]。アマンは

「外国からアフリカに調査に来た人がいても2つの教会を区別することは殆ど不可能だったろう」と、この二つの教会の類似性を強調している[7]。

しかしながらやはり差異がないわけではなかった。特に両教会は秘蹟に関しては真っ向から対立した。すなわちtraditorの教会への帰順の際、カトリック教会はそのまま認めたが、それに対しドナティスト教会はtraditorへの再洗礼の必要を訴えた。この穏健派と厳格派との論争は中世における秘蹟論争にも強く影響を与えており、神学的にも重要な問題であったと言ってよい[8]。また4世紀のローマ帝国内では、北アフリカと同じように、様々な地域において神学等を理由に同胞と争うキリスト教徒が少なからず存在したが、かかる問題は概ね穏健派に収束する形で解決したのに対し、ドナティスト教会は、断続的な迫害を受けつつも帝国に対して抵抗した。特にドナティストはcircumcelliones と呼ばれる、熱狂的な下層自由民を率いてカトリック聖職者らを襲ったとされる[9]。その後、ドナティスト教会は北アフリカにおいて大きな勢力を保ち、411年のカルタゴ教会会議において消滅を宣言されたにもかかわらず、イスラーム時代の到来まで存続した。その意味でこの教会の存在は特異であり、このことはドナティズム運動という概念も生みだし、多くのローマ史研究者にドナティスト教会への関心を抱かせた。

本稿はまずドナティスト研究の流れを概観する。その結果我々は多様な見解を目にすることになるが、その一方でほとんどの研究者に一貫して共通する前提に気付く。それは、traditorの問題を根本的な教会分裂の原因とみなしていることである[10]。その際、分裂以前にもtraditorの扱いをめぐる問題に関して穏健派と厳格派の対立が既に生じていたとし、前者がカトリックに、後者がドナティストになったと考えられてきた。この背景には、従来の研究者はドナティストのtraditorへの厳格な態度を、アフリカ人の持つ「狂信性」「非妥協性」といったメンタリティーにア・プリオリに帰してきたことがある。確かに分裂以前からtraditorの問題が見られるのだが、それでは、ここで言う厳格派と後のドナティストは果たして同一視できるであろうか。この点を次に検討し、その結果、ドナティスト教会を生み出したとカトリック側が主張する司教らは、少なくとも分裂以前においては、traditorをめぐる問題によって教会が分裂してしまうことを危惧し、これを避けたことを確認したい。またドナティスト教会の司教らは、実際にはtraditorであったことからも、いわゆる厳格派とは異なることを示す。最後に、なぜドナティストらは、教会分裂後にtraditorの問題を持ち出したのかという問いの答えを明らかにする。結論から言えば、ドナティストが主張したtraditorの問題は、教会分裂の際には表面上の理由でしかなかった。それはこの対立が元々、神学的な意味での穏健派と厳格派の対立ではなかったことからもわかる。本稿は以上の点を明らかにし、カトリックとドナティストによるイニシアティブ争いの中で、ドナティストがそれまでの地位から排斥されていくという、ドナティスト研究における新たな視座を示すことを目的とする。

1．研究史

ドナティスト研究は古くは宗教改革期から見られるが、本格的な歴史学研究としての性格を帯び始めるのは19世紀の後半になってからである[11]。これらの諸研究と、戦前のフランス考古学調査団の成果を交え、理論的かつ壮大な著述を成し遂げたのがFrendである[12]。以下、簡単ではあるが、Frendの研究を見ていく。

ディオクレティアヌスによる大迫害の結果、様々な地域、例えばローマ、ヒスパニア、エ

ジプトなどでは、北アフリカと同様、穏健派と厳格派の対立が生じたが、それにもかかわらず穏健派の線で事態は収束していった。では北アフリカにおいてなぜドナティストは熱狂的に抵抗しつづけたのか。その理由はアフリカの固有性に見出さなくてはならない。Frend は北アフリカにおけるドナティストの地理的分布に着目し、その結果カトリックはおもに「ローマ化」、都市化した地中海沿岸部に勢力を持つ一方、ドナティストはおもに「ローマ化」していない田園・村落地帯である内陸部に勢力を持つことを確認する[13]。特に前者は「ローマ化」し、都市化が進んだアフリカ・プロコンスラリス州（以下アフリカ州）に、後者は「ローマ化」せず、田園・村落地帯であったヌミディア州に勢力を誇った[14]。Frend はカトリック、ドナティストの地理的分布を基に、カルタゴを代表とするアフリカ州とヌミディア州を類型的かつ二項対立的に理解し、そしてそれらの社会経済的側面及び文化的側面からドナティストの持つ特殊性を示そうとした。

ドナティストの熱狂性は何に起因するのか。Frend はこの問いに答えるために、アフリカ州とヌミディア州の社会経済上の差異に目を向けた。すなわち、いわゆる「3 世紀の危機」を受けてカルタゴなどアフリカ州の諸都市は衰退していく一方、都市ではなく農村共同体で構成されたヌミディア州では自給自足であったためその影響は少なく、衰退を免れた[15]。その後、窮乏した帝国は、「ローマの穀倉」たる北アフリカを搾取することになるが、その皺寄せがヌミディア民衆に降りかかった。こうして、搾取の主体である徴税人や大土地所有者である都市上層民に対する不満が、次第にヌミディア民衆の中で増大するようになる。Frend 曰く、ドナティストの熱狂性とは、徴税人などから継続的に搾取されたヌミディア民衆の社会への不満の表れであった[16]。

またドナティストによる帝国への抵抗の理由に、Frend は以下のごとく、ベルベル系ヌミディア人の反ローマ感情を挙げる。ヌミディア人にとっての従来の神々は、サトゥルヌス、ユノ＝カエレスティス両神であったが、この両神は元々バアル＝ハモン、タニットというフェニキア人の神々であった。サトゥルヌス神、ユノ＝カエレスティス神の主な特徴の一つとして古典古代的文化の影響からの独立が挙げられるが、その中には、保守的で遠い昔からの慣習や宗教に根ざし、征服者らの見通しに反発心を持ったベルベル人のローマに対する反感が看取できる。しかし 3 世紀に入る頃になると両神は野外の聖域から神殿へ移され、そしてパンテオンの神々と結びつき、ひいてはローマ皇帝とも結びついてしまった。このサトゥルヌス神、ユノ＝カエレスティス神のシンクレティズム、「ローマ化」への傾向が、ベルベル系ヌミディア人らをキリスト教に改宗させたのであり、結果として北アフリカにおけるキリスト教の勝利をもたらしたのであった[17]。ローマに対する反抗の態度はドナティストにも引き継がれ、ドナティストの中ではローマとの対決の姿勢が奨励され、殉教はローマに対する勝利を意味するようになる。ドナティストの抵抗とは、ベルベル系ヌミディア人のかかる姿勢の表れであった[18]。

最終的に、Frend は類型的かつ二項対立的にカトリック、ドナティストを理解した。すなわちカトリックは「正統派」「平和的」「親ローマ」「都市」「上層市民」「ローマ文化」という諸因子を持つ一方、ドナティストは「分離派」「狂信・熱狂的」「反ローマ」「農村」「下層民」「アフリカ土着文化＝ベルベル文化」という諸因子で構成されているとする理解である。その結果、Frend のテーゼは我が国では以下のごとく解されてきた。それは、ドナティズム運動が、まさに「民族主義的反ローマ闘争」[19]として、最終的に「ローマ支配からの離脱運動

へと発展」[20]したという解釈であった[21]。

上述した Frend の類型的かつ二項対立的理解は当否をめぐり活発に議論され、その結果多くの批判を生みだすことになった[22]。Jones は、民族主義的な運動とこれまでみなされていたベルベル系のフィルムスによる反乱の際[23]、フィルムスの兄弟であったギルドは帝国側についたこと、またドナティストはベルベル語ではなく、ラテン語を用いて著述していたことを挙げ、ドナティズム運動にアフリカ民族主義運動の側面を見出す従来の見解を否定した[24]。つまり Frend が想定するローマ的カトリックと、ベルベル的ドナティストという類型的理解は、Jones の見解を考慮に入れるならば受け入れられない。Brown は、ドナティストはタムガディなどといった都市も拠点にしていたと同時に、パルメニアヌスやペティリアヌスといったドナティストの指導者も「ローマ化」された教養階級の出身であったことを指摘し、Frend の理解をこの運動の多様性を説明するには単純過ぎるとして斥ける[25]。Markus は、神学的に見て北アフリカの伝統に基づいているのはドナティストであり、分裂後もドナティストは何も変わっていないと主張することで、カトリックを正統派、ドナティストを分離派とみなす Frend の理解を批判する[26]。

Frend 以降のドナティスト研究は、Frend の理解に対する批判という形で、ドナティスト教会の多様性に目を向けるようになった。Lepelley は 412 年に発布されたドナティスト異端令に注目した[27]。その法はドナティストに対して階級別の罰金を命じているが、興味深いことに対象とされた階級の中には inlustres や spectabiles、senatores といった上層階級も含まれている[28]。Lepelley はプロソポグラフィカルな手法で、上層階級の証でもある clarissimi と称されていた人々の中に、ドナティスト教会に好意的であった者を挙げ、ドナティストの支持基盤は下層階級だけではないことを示した。

一方、わが国では長谷川氏が、5 世紀初頭におけるカトリック、ドナティストの教会政治的側面に目を向けることで、従来まで強調されてきたドナティストの反ローマ的性格に対して疑問を投げかけている[29]。ちょうど 400 年頃になると、カトリックは帝国のドナティスト弾圧政策にあわせてドナティストの論駁を目的としたプロパガンダに精力を注ぐようになる。この時期にアウグスティヌスの著作活動が活発化したことは決して偶然ではない。またカトリックは実際に宮廷に訪れ、帝国にドナティストの弾圧を請願することでドナティスト弾圧の勅令を獲得した。しかしかかる宮廷ロビー活動に従事したのはカトリックだけではなかった。すなわちドナティストも宮廷ロビー活動に従事しており、皇帝権力との妥協・結合を目論んでいたのであった[30]。長谷川氏の見解は、ローマ帝国を頑なに拒むというドナティスト像が、少なくとも 400 年頃においては当てはまらないことを示し、従来までのドナティスト像を退けることに成功している。

また最近の潮流として、ドナティストの手による史料を扱う研究も見られる[31]。Tilley はドナティスト史料に含まれたドナティストの聖書解釈に目を向けた結果、彼らは確かにコンスタンティヌス以前の迫害の時代には殉教を大いに賞賛したが、迫害の時期が過ぎると、終末論的モチーフは消えてゆき、律法に忠実なイスラエルの集会 Collecta を予型的模範として選んだことを確認した[32]。Tilley はドナティストを、固定的で、殉教へ向かう、至福千年説論者とする伝統的な像ではなく、その歴史を通して様々な方法で自己アイデンティティを形成していくことで、どうにかして共同体を維持しようとする存在とした。

以上述べてきた最近のドナティスト研究は、ドナティストが決して一枚岩ではなかったこ

とを強く印象付ける。ローマ帝国の多様性に関心が集まっている近年のローマ史の研究状況に合わせ、ドナティストの多様性に目を向ける作業もまた、これからも続けられるべきであろう。しかしかくのごとく多様な見解が主張されてきたことに対し、これらを内包する総合的なドナティスト研究は未だなされていない[33]。ローマ期における北アフリカ社会の実態により近づくために、そしてローマ帝国と当該地域との関係への理解を深めるためにも、Frend の研究以後明らかにされたドナティストの多様性をも踏まえた、新たなドナティスト像を今一度描き、ドナティズム運動を再構成する必要があろう。

さてドナティスト研究は Frend 以降、百花繚乱と言ってもよい程の状況であるが、その一方で、こと分裂原因に関しては驚くほど議論されることがなかった。この点について、ほとんどすべての研究者には共通の前提がある。それはカトリック、ドナティスト両教会を分裂させた要因を、traditor の再洗礼をめぐる神学的穏健派と厳格派の対立に見出している点である。管見の限り、Barnes は唯一 traditor の問題を分裂原因とする見解に疑問を投げかけたが、残念ながらその結論を出していない[34]。これまでほとんど顧みられなかったドナティスト教会成立の原因を探ることは、Frend 以降の諸研究者が強調してきたドナティストの多様性を内包する、新たなドナティスト像を浮かび上がらせる一つの手段になり得るのではないだろうか。そこで次章ではまず、教会分裂以前に traditor をめぐる問題が生じていたかどうかを確認し、続いて、もし穏健派と厳格派が対立していたとすれば、この対立が教会分裂の原因であったという前提が妥当であるかどうかを検討したい。

2．穏健派と厳格派の対立

なぜほとんどの研究者は traditor の問題を教会分裂の原因とみなしたのか。その理由を把握するために、まずはじめに、従来まで語られてきたドナティスト教会の成立過程を見ることにする。

事はカルタゴ司教メンスリウスの病死をうけて 307 年、ないし 308 年に起こった、カエキリアヌスのカルタゴ司教叙任に始まる。303 年から始まったディオクレティアヌスのいわゆる「大迫害」によって北アフリカは少なからぬ殉教者や告白者を輩出することになったが[35]、同時にそれ以上に多くの棄教者を生み出した。棄教者らはディオクレティアヌスの勅令に従い、聖書を当局に引き渡したので traditor と呼ばれた。迫害が小康状態になると、棄教者の帰順に対して寛容に扱おうとする人々と、帰順の際に再洗礼を施すべきだと主張する厳格派が対立するようになった。こうした中、カルタゴ助祭カエキリアヌスは穏健派によって司教に叙任されたが、ヌミディア首座司教セクンドゥスは、カエキリアヌスの叙任にあたったアプトゥンギのフェリクスが traditor であることを理由に、カエキリアヌスの叙任を認めることはできないと強く反対したのだった。そしてセクンドゥスは厳格なヌミディア司教らを召集、対立司教としてマヨリヌスをカルタゴ司教として選出し、分離派を形成した。ここに北アフリカのキリスト教会は分離することになるのである。分離派に選出されたマヨリヌスはまもなく亡くなり、その後カリスマ的な指導者ドナトゥスが引き継いだのだった。

以上がドナティスト教会成立のエピソードであり、年代に関して議論は分かれるが、ほとんどの研究者がこれを受け入れていると言ってよい。このエピソードを補強するために、多くの研究者は、北アフリカにおけるキリスト教の伝統を念頭に置き[36]、分裂以前から穏健派と厳格派の対立が生じていたとし、前者がカトリックに、後者がドナティストになったと考

える[37]。

両教会が分裂する前にヌミディア人らが traditor を問題視したとされる根拠に、おそらく305年にキルタで開かれた教会会議の史料がある[38]。この会議は後にカエキリアヌスに反対し、マヨリヌスをカルタゴ司教に任じた上述のセクンドゥスの指揮下にあった。当時セクンドゥスは traditor の疑いを掛けられた聖職者に尋問しており、この点を考慮に入れるのなら、ドナティスト教会が誕生する以前から traditor の問題が、少なくともヌミディアにおいては重要であったと言える。しかし興味深いのは、セクンドゥスとリマタの司教プルプリウスのやり取りである。セクンドゥスの尋問に対し、プルプリウスは反論する。

> 聖書を差し出すよう監督官と参事会によって捕らえられたあなたは何をしたのだ？何かを差し出すか、何でも差し出されるよう命じる以外に、どうやってあなたは彼らから解放されたのだ？[39]

ここでプルプリウスはセクンドゥスも traditor であることをほのめかしている一方、セクンドゥスはこれに反論することはなかった。つまり、これまで厳格派とされ、教会分裂の張本人ともみなされてきたセクンドゥスも traditor であった可能性もある。また、プルプリウスが激昂しながら反論を続けた結果、セクンドゥスの甥である小セクンドゥスは以下のようにセクンドゥスに発言する。

> 彼があなたに対して言ったことを聞いていますね。彼はここを去り、分離することを覚悟しております。それは彼だけではなく、あなたが非難する者の皆もです[40]。

小セクンドゥスは、この時教会分裂の危険性を察知した。上記の小セクンドゥスの言葉を受けて、教会分裂の危機を感じたセクンドゥスは結局 traditor の疑いのあった聖職者らを不問に付し、会議を終わらせる。ここで重要なのは、セクンドゥスは確かに traditor の問題に関心はあるが、それよりも教会の分裂危機を回避する方を選択したことである。ドナティスト教会を生み出したとされるセクンドゥスは、少なくともこの時期において、教会分裂の危機に対して慎重な態度をとったということは見落とされるべきではない。

またカエキリアヌスを破門にしたカルタゴでの会議に参加した司教の中には、前述のプルプリウスや他にも traditor であった司教もいた。

> それからまもなく、traditor や背教者、殺人者（これはプルプリウスを指す）らといった多くの人々はカルタゴに着き、カエキリアヌスの叙任の後になって、マヨリヌスを、あなたは彼の司教座に座っていますが、分離するように叙任したのです[41]。［（　）は丸山による。以下同様。］

つまり、カエキリアヌスを叙任したフェリクスが traditor であるとし、カエキリアヌスのカルタゴ司教就任を断固拒絶したヌミディア人らは、自身も traditor であった。それ故ドナティストはカトリックのみならず、現代の研究者の嘲笑を買った[42]。例えば、これに関して、Frend は合理的な説明はできないとし、それ以上論を進めるのを止めてしまう[43]。興味深いことに、

Frend は traditor の問題をめぐるドナティストの不合理さになぜか納得してしまっている。Frend や、その他の研究者がこの点を特に疑問視しなかった原因の一つには、ドナティストの不合理性が、イメージとしての、アフリカ人の「熱狂性」「狂信性」に通じるものがあったのではないだろうか。しかし上述のとおりキルタの教会会議において、後に教会分裂を引き起こしたとされるセクンドゥスが traditor への再洗礼よりも、教会の統一を優先したことを考慮に入れ、本当に合理的に考えるのならば、二つのことが言える。一つは、ドナティスト教会の成立に関わったヌミディア司教らは、従来まで考えられていたような厳格派とは異なるということである。つまり、たとえドナティスト教会が生まれる以前から traditor の再洗礼をめぐり、穏健派と厳格派の対立が見られたとしても、前者がカトリックへ、後者がドナティストへといった単純な移行は否定されるべきである。そして二つ目こそ重要である。すなわち、以前に traditor の再洗礼より教会の統一を優先したセクンドゥスがカエキリアヌスの叙任を拒絶し、わざわざ別の司教を立てた（その結果教会は分裂した）原因は、traditor の問題以外に見出すべきである[44]。

それではセクンドゥスはなぜカエキリアヌスのカルタゴ司教叙任を拒絶したのであろうか。次章でこの問いを検討したい。

3．分裂原因論としての traditor 問題の実際

セクンドゥスがカエキリアヌスの司教叙任を拒絶した理由を知るためには、話をより深めねばならない。本章では、まずカエキリアヌスがどのように司教として叙任されたかを見る。その際、当該時期のカルタゴ教会の状況も考慮に入れることで、以下のことを明らかにする。すなわち、カエキリアヌスの叙任は北アフリカにおける教会の慣習を無視したものであり、ヌミディア首座司教のイニシアティブをも奪おうとする、いわば簒奪行為であったということである。

当該時期のカルタゴ司教選挙の背景には、前司教メンスリウスが皇帝に召喚されローマへ向かったが、その帰途で死んでしまったことがある。しかもメンスリウスはカルタゴを発つ際、seniores に教会財産を預けたが[45]、メンスリウスは完全に彼らを信用していなかったからか、もし自分が亡き者になった場合、次の司教にそれを譲るようある女性に伝えてあった[46]。カトリック司教オプタトゥスはこれを踏まえてカエキリアヌス叙任の出来事を以下のように伝えている。

> 主の命により、マクセンティウスがキリスト教徒に慈悲を与えたとき、自由が返還されました。ボトゥルスとケレスティウスはカルタゴで叙任されることを望み、ヌミディア人らがいない間に、近隣の司教らのみがカルタゴで叙任することを要求されるよう苦心したと言われています。そのとき全民衆の投票によってカエキリアヌスが選び出され、アプトゥンギのフェリクスの手によって司教は叙任されたのです[47]。

ここでボトゥルス、ケレスティウスなる者らが司教になるために尽力した理由の一つに、おそらく教会財産を受け取ることがあったと思われる。しかし彼らの願いは叶わず、結局カエキリアヌスが司教になるのだが、これにルキッラという裕福な婦人が反発した。オプタトゥスによれば、ルキッラは以前、殉教者の骨に接吻をしたかどで当時助祭であったカエキリア

ヌスに叱責されたことがあり、これが原因でルキッラはカエキリアヌスの司教叙任に反対したらしい[48]。事の真偽はともかく、ルキッラはヌミディア司教らに協力を要請し、ようやくセクンドゥスが登場する。

それでは、一体なぜルキッラはヌミディア司教団に協力を要請したのだろうか。この点を念頭に置きながら、カエキリアヌスの司教就任を伝える先の史料を読むとあることに気付く。それは、どうやらボトゥルスとケレスティウスは急いで司教に叙任されるよう事を進めていることである。それではなぜ「ヌミディア人らがいない間に」という表現がなされているのだろうか。実は、ヌミディアの司教らがカルタゴ司教を叙任するのがこの時期の慣例であった[49]。つまりボトゥルスとケレスティウスは、ヌミディア司教団がカルタゴにやってくる前に司教になろうとしたのであり、北アフリカの慣例を無視したのである。彼らの試みは失敗したが、しかし注目すべきことは、カエキリアヌスもヌミディア司教団を待たずに急いで叙任されたということである。というのもカエキリアヌスも、セクンドゥスらによって叙任されていないと同時に、カエキリアヌスの叙任に携わった司教の数は、やはり当時の慣例であった司教叙任に必要な司教の数であった 12 名ではなく、3 名でしかなかったからである[50]。つまりカエキリアヌスは勝手にカルタゴ司教になったのであり、セクンドゥスらヌミディア司教団から見れば、その行為は簒奪行為以外の何ものでもないだろう。

実際、後のドナティストはカエキリアヌスらの行為をそのようにみなしていた。この出来事を受けて、セクンドゥスらヌミディア司教団は、カエキリアヌスを叙任した 3 名の司教の一人であったアプトゥンギのフェリクスが traditor であるので、カエキリアヌスの叙任は認められないと強く主張した。それが妥当であるかどうか、帝国は後に調査をしたが、このときの裁判記録の中で興味深い一節が見出される。

> 私は、カトリックの信仰を持つキリスト教徒らの seniores の名において話します。至高なる諸皇帝のもとで、カエキリアヌスとフェリクスに対する訴訟が行われるべきでしょう。彼らは、同じ信仰の中での首位権を全力で奪おうとしています[51]。

これは 314 年に二人委員スペレティウスの前で行われた訴訟の中で記録された、マクシムスという者の発言である。まず気付かねばならないことの一つに、カエキリアヌス、フェリクスを批判しているマクシムスは、自身を「カトリック」とみなしていることがある。この後マクシムスはフェリクスが traditor であることを挙げ、裁判の必要性を訴えている点を鑑みれば、おそらくマクシムスはいわゆるドナティストであろう[52]。つまるところドナティストとはカトリック側のレッテルに過ぎない[53]。そしてもう一つは、少なくともドナティスト側はカエキリアヌスのカルタゴ司教叙任、もしくは叙任後の行動を、簒奪行為とみなしていたことである。

またカエキリアヌスらのかかる行為は、カルタゴ内で見ればカルタゴ教会の財産相続の中で生まれたものであるが、カルタゴの外に目を向ける場合、カルタゴ教会と、ヌミディアにおける諸教会との間の首位権争いの中で生まれたものと解釈できる。ヌミディア首座司教セクンドゥスはこのカエキリアヌスによる簒奪とも言うべき行為を当然認めることはできなかった。その理由は、カエキリアヌスが traditor の疑いがあったフェリクスによって叙任されたという神学的なものだけに止まらないであろう。むしろもっと世俗的な利害が働いていたと

想像することは難しくない。しかし従来の慣例を無視する簒奪者を破門し、その勢力を無力化するためには、カルタゴの聖職者や民衆、そしてカルタゴ以外にいる人々を納得させるだけの正当性が必要になってくるのも事実である。だからこそセクンドゥスはtraditorの問題を持ち出したのである。カエキリアヌスは叙任を拒絶するセクンドゥスに対して、以下のように言う。

> もう一度カエキリアヌスは以下のように命じた。もしフェリクスが、彼ら（ヌミディア司教ら）が信じるがごとく、カエキリアヌスに対して何も渡していないのであれば、彼ら自身がカエキリアヌスを、まだ助祭のままであったがごとく叙任するようにと[54]。

この提案、ないし命令をヌミディア司教らは受け入れなかった。このことは従来ドナティストの非妥協的態度の典型としてみなされてきた[55]。しかしながら、上記の提案はカエキリアヌスの歩み寄りとは言えない。というのもカエキリアヌスはそもそも正当に承認された者ではなかったからである。ヌミディア首座司教セクンドゥスは、慣例を無視し、北アフリカ教会における首位権を得ようとするカエキリアヌスを司教として叙任するわけにはいかなかった。

以上見てきたとおり、traditorの教会帰順をめぐる問題を、教会分裂の根本的な原因として解釈することは受け入れるべきではない。以前に、traditorへの再洗礼よりも教会の統一を重要視したセクンドゥスは、カエキリアヌスの非合法的な司教叙任に直面して初めて、他の者を司教として叙任することを選んだ。セクンドゥスの中に、神学的な理由だけでは説明できない感情が湧き起こるのも当然であった。そしてかかる分裂の状況の中、コンスタンティヌスが介入し、最終的にヌミディア司教らの側は分離派として排除されていく。以下その過程を追うことにする。

312年10月28日、コンスタンティヌスは、当時イタリアを支配していたマクセンティウスをミルウィウス橋にて打ち破り、ローマに入城した[56]。そしてコンスタンティヌスは、そこで初めてアフリカの教会分裂の事態を知る。その後、理由はともあれ、コンスタンティヌスはカエキリアヌスに正統派の地位を与えた[57]。セクンドゥスを始めとするヌミディアの司教らにとって、このことはまさに晴天の霹靂であったに違いない。カエキリアヌスら簒奪者がいまや北アフリカの「カトリック」となった。これを受けて「ドナティスト」は必死にコンスタンティヌスに陳情する。

> 私たちはあなた様、至高なる皇帝コンスタンティヌスにお尋ね致します。というのもあなた様は正統な生まれの方ですから。あなた様の父君は他の諸皇帝らの中で、迫害をなさらなかったし、この偉業によってガリアは迫害から解放されたのです。これに対してアフリカでは私たちと他の者どもとの間において争いがございます。私たちは、仁慈によってあなた様がガリアからの判定者を与えられるよう命ぜられることを熱望しております[58]。

少なくともこの嘆願からは、従来まで言われてきたドナティストの反ローマ性という印象は窺えない。つまり、「ドナティスト」教会は少なくとも初めから反ローマ帝国分子で構成され

ていたわけではない。この嘆願の後、ローマやアルルで教会会議が開かれる。しかし彼らが認められることはなかった。「ドナティスト」はその度に嘆願していたのだろう、コンスタンティヌスは諦めの悪い彼らに対して苛立ちを感じるようになる。

> ・・・しかし、一部の者は、自らの救いと自分たちの神聖な宗教への然るべき敬虔の念を忘れ、現在でも私憤を持ち続けている。彼らはすでに公にされた裁定に従おうとはせず、結局少数の者だけが自分の判断や意見を述べたに過ぎぬとか、調べの必要なすべての問題を最初に正しく検討せずに全く性急かつ唐突に裁定を下そうとした、とか申し立てている[59]。(秦訳)

「ドナティスト」が私憤を持ち続けているというコンスタンティヌスの見方はある意味正しい。彼らは、うまく帝国と結びついたカエキリアヌスらに出し抜かれたのであり、私憤を持たざるを得なかった。カエキリアヌスら「カトリック」はコンスタンティヌスによって、迫害中に没収された教会財産や、無制限とも言える経済援助、および公役免除といった恩恵を享受する[60]。他の地域における穏健なキリスト教徒が「ドナティスト」を見たとき、彼らはカトリックを妬んでいるようにしか見えなかったであろう。

> おそらくここから、アフリカの地でかくも熾烈な抗争をしていた者たちが、犯罪にすら手を出す事態が起こったのです。悪しきダイモーンが現在の繁栄の謳歌を明らかに妬み、この者たちを道を踏み外した行為へと駆り立てたのです。彼らへの皇帝の怒りを煽るためです[61]。(秦訳)

「ドナティスト」の度重なる嘆願はコンスタンティヌスには頑固な態度としか写らず、最終的に彼らは帝国による迫害を受けることになる。コンスタンティヌスによる「カトリック」への好意的な政策の裏側で、「ドナティスト」は迫害に対する悲痛な想いを、殉教伝に綴らざるを得なかった。

> 様々な歳の者、男も女も殺され、バシリカの中央で切り倒された間、みな硬く目を閉じ続けました。まさにこのバシリカの、壁と壁の間で、多くの体が切り倒され、埋められたのです[62]。

おわりに

以上見てきたように、本稿はまず、traditor 問題、すなわち traditor が教会に帰順する際、再洗礼が必要であるかという問題が教会の分裂以前にも見られたことを再確認した。続いて当該時期における穏健派と厳格派が、本当に後のカトリックとドナティストにそのまま移行していったのかを見た。その結果、この図式の妥当性には否定的にならざるを得なかった。特に分裂を引き起こしたと言われてきたセクンドゥスが、この時期において、traditor への再洗礼よりも教会の統一を優先したことは看過されるべきではない。そして最後に、これまでほとんどの研究者が疑問を抱かなかった、traditor の問題を教会分裂の原因とみなす見解の当否を検討し、以下の結論に至った。すなわち、カエキリアヌスの叙任はそもそも北アフリカの

慣例を無視した、いわば非合法的な行為であり、北アフリカの教会における首位権を奪い取ろうとするものであった。カエキリアヌスを中心とした一集団によるカルタゴ司教座の奪取、そしてそれに続く北アフリカにおける「カトリック」の地位獲得の中、「ドナティスト」らはどうにか以前の状態に戻そうとし、traditor を理由に挙げたのだった。その意味で traditor 問題は表面上のものであったと言ってよい[63]。

ドナティストは traditor とはまったく無縁の、狂信的、熱狂的なキリスト教徒ではなかった。そして彼らは先天的に反ローマ的感情を持っていたわけでもなかった。ドナティストはベルベル系ヌミディア人であるから、反ローマ的であり、かつ狂信的で攻撃的であるという論理は破棄されねばならない。実は、従来のドナティスト研究の中で、カエキリアヌスの司教叙任は北アフリカの慣例に則していなかったという記述がまったくなされてこなかったわけではない。Frend は決して北アフリカの慣例を見落としてはいない。少なからぬ研究者がこの点を無視してきたことを考慮に入れるならば、*The Donatist Church* は総合的著述として大いに評価されてよい。しかし Frend はドナティストの「狂信性」あるいは「熱狂性」を、北アフリカ人のメンタリティーによって説明しようとし、traditor の問題を過大評価してしまった。その際、Frend は北アフリカ人のメンタリティーの中に、熱狂性、あるいは狂信性をア・プリオリに見出した。ここに、無意識的な植民地主義的歴史観が看取され得るのである。

さて、本稿のごとく教会分裂の状況を再構成すると、新たな疑問が生まれてくる。すなわち、なぜコンスタンティヌスはカエキリアヌスらを「カトリック」とみなしたのか、という疑問である。国家に対して反抗的な集団よりも、国家に対して従順な集団の方がコンスタンティヌスによって好まれるのは当然であり、また実際コンスタンティヌスはコルドバの司教ホシウスの助言によって、前もって穏健派の線で統合する政策を掲げ、そしてカエキリアヌスらこそが穏健派であるとの情報をコンスタンティヌスはホシウスから聞いていたとし、初めからカエキリアヌスらを「カトリック」とみなした、といった見解が従来のものであった[64]。かかる見解から、コンスタンティヌスこそドナティスト問題を引き起こした張本人であるという主張も少なからずなされたのであるが[65]、はたしてコンスタンティヌスは本当に前もってカトリックを想定していたのであろうか、つまり一方的にコンスタンティヌスがカエキリアヌスらをカトリックと断じたのだろうか。

その一方、カエキリアヌスらに目を転じてみると、彼らは実にうまく権力を手中に収めたと言ってよい。ドナティズム運動はさることながら、彼らのドナティストとのイニシアティブ争い、いわば「カエキリアニズム」運動とでも言い表せる、彼らによる権力奪取の過程に更に目を向けるべきであろう。それによって、上述の問いへの答えが見えてくるのではないか。この点は今後の課題としたい。

《註釈》

[1] その一つに「ローマ化」の問題が挙げられる。従来ではローマの支配が属州社会にいかに大きな影響を及ぼしたかを示すために、属州社会の「ローマ化」という表現がなされてきたが、属州社会の「ローマ化」はいわばア・プリオリな前提であった。しかし近年ではその「ローマ化」の内実は批判的に検証されるとともに、「ローマ化」という概念そのものについても活発に議論されている。「ローマ化」概念をめぐるイギリス国内での議論については、南川高志『海のかなたのローマ帝国－古代ローマと

ブリテン島ー』岩波書店、2003年、特に19-59頁を参照。アフリカにおける「ローマ化」については以下を参照。栗田伸子「ローマと低開発ーAlbert Demanの所論を中心にー」『歴史評論』400号、1983年、60-72頁; 栗田伸子「『ローマの平和』とアフリカ社会」弓削達、伊藤貞夫編『ギリシアとローマ—古典古代の比較史的考察—』河出書房新社、1988年、521-545頁; 栗田伸子「ローマとアフリカー脱植民地学のその後ー」『歴史評論』571号、1997年、17-27頁。

[2] 南川、前掲書、217-220頁。

[3] ベルベル人とは、ローマ支配以前の北アフリカに存在したヌミディア人やマウレタニア人など、ベルベル諸方言を用いた人々の総称であり、本来は人種的区分というよりも言語的区分である。栗田伸子「ドゥッガとヌミディア王権」『東京学芸大学紀要（第3部門：社会学）』50、1999年、117頁。

[4] 北アフリカにいつ頃キリスト教が入ってきたかについてはよくわかっていない。史料で確認できるのは180年頃になってからであるが、その後キリスト教勢力は偉大な司教や多くの殉教者を生みだすほどに発展した。4世紀以前の北アフリカにおけるキリスト教の歴史についてはFrend, W. H. C., *The Donatist Church: A Movement of Protest in Roman North Africa*, Oxford, 1952 (rep. 1971)（以下*The Donatist Church*と略記), pp. 87ff. またはRaven, S., *Rome in Africa*, 3rd ed., London and New York, 1993, pp. 150-166などを参照。

[5] 分裂時期をめぐる議論に関しては以下を参照。Barnes, T. D., The Beginnings of Donatism, *Journal of Theological Studies*（以下*JThS*と略記）26, 1975, pp. 14-16; Frend, W. H. C. and Clancy, K., When Did the Donatist Schism Begin ?, *JThS* 28, 1977, pp. 104-109; Birley, A. R., Some Notes on the Donatist Schism, *Libyan Studies* 18, 1987, pp. 30-32; Edwards, M. (ed.), *Against the Donatists*, Liverpool, 1997, p. 16; Dearn, A., The Abitinian Martyrs and the Outbreak of the Donatist Schism, *Journal of Ecclesiastical History*（以下*JEH*と略記), vol. 55, n. 1, 2004, p. 1.

[6] ドナティストはアリウス派とは異なり、三位一体の実体は1つであることを認めているとアウグスティヌスは述べている。Augustinus, *Ep.* 185, 1. 1（坂口昂吉・金子晴男訳「ドナティスト批判」『ドナティスト論駁集』[アウグスティヌス著作集8]、教文館、1984年）.

[7] A. アマン（印出忠夫訳）『アウグスティヌス時代の日常生活』下、LITHON、2002年、183頁。

[8] 堀米庸三『正統と異端—ヨーロッパ精神の底流—』中公新書、1964年。

[9] このcircumcellionesの存在によって、ドナティストの「狂信性」は殊更に強調されてきた。ドナティストの狂信性や熱狂性に関するカトリック側の記述は枚挙にいとまがない。Augustinus, *Ep.* 185, 3. 12; 4. 15-18; Eusebius, *Vita Constantini*, i, 45, 2-3（以下*VC*と略記）（秦剛平訳『コンスタンティヌスの生涯』京都大学学術出版会、2004年）; Optatus, *De Schismate Donatistarum*, ii. 17-18 (Ziwsa, C. [ed.], *Libri XII*, *Corpus Scriptorium Ecclesiasticorum Latinorum* 26, Vindobonae, 1893; Labrousse, M. [éd.], *Traité contre Donatistes, Sources Chrétiennes* 412, 413, Paris, 1995, 1996; Edwards, *op. cit.*); Possidius, *Vita Sancti Augustini*, 10, 12（熊谷賢二訳『聖アウグスティヌスの生涯』創文社、1963年）. circumcellionesに関しては以下を参照。Birley, *op. cit.*, pp. 32-34; 新田一郎「キルクムケリオーネスに関する一考察」『西洋史学』92号、1973年、1-21頁; 後藤篤子「後期ローマ帝国における民衆運動ーキルクムケリオーネスについて—」『歴史評論』403号、1983年、58-72、92頁。

[10] 従来のドナティスト研究において、カトリック、ドナティスト両教会の分裂は、教会分離と表記されてきた。しかし「分離」という言葉は、その主体（この場合「分離派」とみなされたドナティスト）が意識的に離れるというニュアンスを内包しており、ドナティストに当てはめるものではないと私は考える。本稿は、ドナティストは自らの意志でカトリックから分離したのではなく、むしろカトリックによって外に押し出されたという実状を明らかにするであろう。この点を考慮に入れて、本稿では教会分離ではなく、教会分裂と表記する。

[11] Frend以前の研究史については以下を参照。Frend, W. H. C., The Donatist Church: Forty Years on, in Landman, C. and Whintelaw, D. P. (eds.), *Windows on Origins: Essays on the Early Church in Honour of Jan Stoop on his Sixtieth Birthday*, Pretoria, 1985, pp. 70-84.

[12] Frend, W. H. C., *The Donatist Church*.

[13] *Ibid.*, pp. 50-51.

[14] *Ibid.*, pp. 30-31.

[15] むしろヌミディア内陸部は4世紀から5世紀の間が発展期であった。*Ibid.*, p. 66.

[16] *Ibid.*, pp. 66-75.

[17] *Ibid.*, pp. 100-105. Frendは3世紀後半には都市だけでなく、農村にもキリスト教化が進んでいったと主

張するが、部分的な証拠しか提示していない。Jones も 3 世紀後半には田園地帯においてキリスト教がドミナントな宗教であると述べているが、自身も認めているように根拠に乏しい。Jones, A. H. M., The Social Background of the Struggle between Paganism and Christianity, in Momigliano, A. (ed.), *The Conflict between Paganism and Christianity in the Fourth Century*, Oxford, 1963, pp. 17-37, esp. pp. 18-19.

[18] Frend, *The Donatist Church*, pp. 106-107.

[19] 後藤篤子「キリスト教ローマ帝国における宗教闘争」弓削達・伊藤貞夫編『ギリシアとローマ－古典古代の比較史的考察－』河出書房新社、1988 年、484-486 頁。

[20] 長谷川宣之「5 世紀初頭アフリカにおけるカトリック教会とドナティスト教会」『西洋史学』205 号、2002 年、48 頁。

[21] ただし Frend 自身はドナティズム運動を把握する際、民族主義という言葉を決して用いておらず、またフィルムスの乱におけるドナティストの敵意はローマ帝国ではなく、「現世」一般であったとし、ドナティストは決してローマ帝国の転覆など考えていないと判断している。Frend, *The Donatist Church*, p. 171. 内田氏はこの点を正確に読み取っている。内田芳明「ドナティズム運動とその社会的背景－W. H. C. Frend, *The Donatist Church: A Mouvment of Protest in Roman Africa.* (1952)を綴って－」『歴史学研究』198 号、1956 年、34 頁。

[22] Frend を批判する諸研究者の位置付けを簡便に知るには以下のものがよい。Markus, R. A., Christianity and Dissent in Roman North Africa: Changing Perspectives in Recent Works, *Studies in Church History* 9, 1972, pp. 21-36 (=Idem, *From Augustine to Gregory the Great*, London, 1983). なお、Frend の見解に対して、私は以下叙述する批判をおおよそ受け入れているが、Frend の見解を全面的には否定していない。Frend テーゼの再考に関しては機を改めて論じたい。

[23] この際フィルムスにドナティストの一部が加担した。そのためドナティズム運動は反ローマ闘争の側面があったと強調されてきた。

[24] Jones, A. H. M., Were Ancient Heresies National or Social Movements in Disguise?, *JThS* 10, 1959 (=Brunt, P. A. (ed.), *The Roman Economy*, Oxford, 1974, pp. 308-329). しかし Jones は、注において *The Donatist Church* を挙げているにもかかわらず、ドナティズム運動をアフリカ民族主義とみなす一連の研究の中で、Frend を議論の俎上に乗せていない。Frend はキリスト教化の原因にベルベル系ヌミディア人の反ローマ感情を挙げただけであり、ドナティズム運動を民族主義的な運動とは解していないと Jones は判断したと思われる。

[25] Brown, P., Religious Dissent in the Later Roman Empire: The Case of North Africa, *History* 46, 1961(=Idem, *Religion and Society in the Age of St. Augustine*, London, 1972, pp. 237-259, esp. pp. 248-250). 後藤、「キリスト教ローマ帝国における宗教闘争」、486 頁。Mandouze も Frend の二項対立的理解では北アフリカの多様性を描くことはできないと強く主張する。Mandouze, A., Le donatisme représente-t-il la résistance à Rome de l' Afrique tardive?, dans Pippidi, D. M. (éd.), *Assimilation et résistance à la culture Greco-romaine dans le monde ancien; Travaux de Sixième Congrès International d'Etudes Classiques (Madrid, Septembre 1974)*, Paris, 1976, pp. 359-366.

[26] Markus, *op. cit.*, esp. pp. 27ff. しかしこの点を Frend は見落としてはいない。Frend, *The Donatist Church*, p. 170.

[27] Lepelley, C., Les sénateurs donatistes, *Bulletin de la société nationale des Antiquaires de France*, Paris, 1990, pp. 45-56 (= Idem, *Aspects de l'afrique romaine*, Bari, 2001, pp. 345-356). ドナティストの経済状況を見ると、ドナティスト教会は上層階級の支援を受けていたと考えてよい。Raven, *op. cit.*, pp. 176-179.

[28] *Codex Theodosianus*, xvi. 5, 52 (Pharr, C. [ed.], *The Theodosian Code and Novels and the Sirmondian Constitutions*, New Jersey, 1952, 2003).

[29] 長谷川宣之「5 世紀初頭アフリカにおけるカトリック教会とドナティスト教会」『西洋史学』205 号、2002 年、46-62 頁。

[30] カラマのドナティスト司教クリスピスは、罰金の支払いに関して皇帝に上告した。Possidius, 12.

[31] 殉教伝など、数少ないドナティスト史料がまとめられたものに以下のものがある。Maier, J. L. (éd.), *Le Dossier du Donatisme, Texte und Untersuchungen* 134, 135, Berlin, 1987, 1989.

[32] Tilley, M. A., *The Bible in Christian North Africa: The Donatist World*, Minneapolis, 1997. また Tilley 自身によってドナティスト史料の英訳がなされている。Tilley, M. A. (ed.), *Donatist Martyr Stories: The Church in Conflict in Roman North Africa*, Liverpool, 1996.

[33] O'Donnell, J. J., *Augustine: A New Biography*, New York, 2005 は最近のドナティスト研究を意欲的に取り

入れると同時に、アウグスティヌスの書簡にも目を配り、良書である。ただ本書は題名の通り、ドナティスト研究の総合的著述とは言えない。Lancel, S. (trans. Nevill, A.), *Saint Augustine*, London, 2002 にも同様のことが言える。

[34] Barnes, The Beginnings of Donatism, p. 15. Barnes は、ドナティストら自身も traditor であったというカトリック側の反駁に注目し、ドナティストがもし traditor であれば、なぜ他の理由ではなく、traditor を理由にカトリックを非難したのかと疑念を持つ。

[35] Confessor の訳。投獄されたが殉教しなかった、あるいはまだ殉教していない人々を指す。

[36] このドナティストの主張した再洗礼は北アフリカでは慣例化されていたものであった。Augustinus, *De baptismo contra Donatistas*, 2. 1（坂口昂吉・金子晴男訳「洗礼論」『ドナティスト論駁集』）.

[37] Jones, A. H. M., *Constantine and the Conversion of Europe*, Toronto, 1948, pp. 93-94; Willis, G., *Saint Augustine and the Donatist Controversy*, London, 1950, p. 2; Barnes, T. D., *Constantine and Eusebius*, Cambridge, 1981, pp. 54-55; Tilley; *The Bible in Christian North Africa*, pp. 51-52; Lancel, *op. cit.*, pp. 165ff; 新田一郎「ドナティズム運動に関する一考察—セクト運動の性格と意義—」『西洋史学』70 号、1966 年、7 頁。

[38] Augustinus, *Contra Cresconium grammaticum et donatistam*, 3. 27. 30 (Maier, 7). この会議は教会会議と呼べるほど司教が集まっているわけでなかった。

[39] *Ibid.*: Tu quid egisti qui tentus es a curatore et ordine ut scripturas dares ? Quomodo te liberasti ab ipsis, nisi quia dedisti aut iussisti dari quodcumque ?

[40] *Ibid.*: Audis quae dicat in te. Paratus est recedere et schisma facere, non tantum ipse, sed et omnes quos arguis.

[41] Optatus, i, 15. 1: Deinde non post longum tempus idem ipsi tot et tales ad Carthaginem profecti, traditores, turati, homicidae, Maiorinum, cuius tu cathedram sedes, post ordinationem Caeciliani ordinauerunt schisma facientes.

[42] P. ブラウン（出村和彦訳）『アウグスティヌス伝』上、教文館、2004 年（原著 1967 年）、202 頁。なお下巻 165-204 頁は 2000 年に原著が再版された際に Brown が付け足したものであるが、最近のアウグスティヌス研究について、非常に有益な情報を我々に提供してくれる。

[43] Frend, *The Donatist Church*, p. 12.

[44] カトリックとドナティストは分裂後、激しい秘蹟論争を展開したのは事実である。しかし、だからといってそれを両教会の分裂の原因とみなす必要はないであろう。

[45] この seniores は、いわゆる司祭団ではなく、教会の運営や財産を管理した非聖職者であるとされる。seniores が 4 世紀においても存在していたことは、北アフリカにおける教会の特徴として、度々言及されてきた。Frend, W. H. C., The *Seniores Laici* and the Origins of the Church in North Africa, *JThS* 12, 1961, pp. 280-284.

[46] Optatus, i. 17.

[47] Optatus, i. 18. 1-2: Iubente Deo indulgentiam mittente Maxentio christianis libertas est restitute. Botrus et Celestius, ut dicitur, apud Carthaginem ordinari cupientes, operam dederunt ut absentibus Numidis soli uicini episcopi paterentur qui ordinationem apud Carthaginem celebrarent. Tunc suffragio totius populi Caecilianus eligitur et manum imponente Felice Autumnitano episcopus ordinatur.

[48] Optatus, i. 16.

[49] いつそうなったかについてはよくわかっていないが、アウグスティヌスが言及している。Augustinus, *Psalmus contra Partem Donati*, 51-53 (Finaert, G. [éd.], *Traités Anti–Donatistes, Oeuvre de saint Augustin* 28, Paris, 1963): "Cum Carthaginem uenissent episcopum ordinare" "inuenerunt ordinatum Caecilianum in sua sede." "Irati sunt quia non ipsi potuerunt ordinare."

[50] Frend, *The Donatist Church*, p. 16.

[51] Optatus, *Acta purgationis Felicis episcopi Autumnitani*, 4: Loquor nomine seniorum christiani populi catholicae legis. Apud maximos imperatores causa agenda erit contra Caecilianum et Felicem, qui principatum eiusdem legis omni ui contantur inuadere. なお Maier 版では Felicem の後にカンマはない。

[52] Mandouze, A. et al., Maximvs 1, *Prosopographie chrétienne du Bas-Empire*, I. *Prosopographie de l'Afrique chrétienne (303-533)*, Paris, 1982, p. 732.

[53] Shaw, B. D., African Christianity: Disputes, Definitions, and 'Donatists', in Greenshields, M. R. and Robinson, T. A. (eds.), *Orthodoxy and Heresy in Religious Movements: Discipline and Dissent*, Lampeter, 1992, pp. 5-34, esp. pp. 8-12. (=Shaw, B. D., *Rulers, Nomads, and Christians in Roman North Africa*, Brookfield, 1995).

[54] Optatus, i. 19. 2; Iterum a Caeciliano mandatum est ut, si Felix in se sicut illi arbitrabantur nihil contulisset, ipsi tamquam adhuc diaconum ordinarent Caecilianum.

[55] Barnes, *Constantine and Eusebius*, p. 56.

[56] Eusebius, *VC*, i. 26-39; 後藤「キリスト教ローマ帝国における宗教闘争」、467-468 頁。

[57] Eusebius, *Historia Ecclesiastica*, x. 6. 1-5（以下 *HE* と略記）（秦剛平訳『教会史』全3巻、山本書店、1986-1988年）.

[58] Optatus, i. 22. 2: Rogamus te, Constantine optime imperator, quoniam de genere iusto es, cuius pater inter ceteros imperatores persecutionem non exercuit, et ab hoc facinore immunis est Gallia. Nam in Africa inter nos et ceteros episcopos contentions sunt. Petimus ut de Gallia nobis iudices dari praecipiat pietas tua.

[59] Eusebius, *HE*, x. 5. 22.

[60] Eusebius, *HE*, x. 5. 15-16; x. 6. 1-4; x. 7. 1-2.

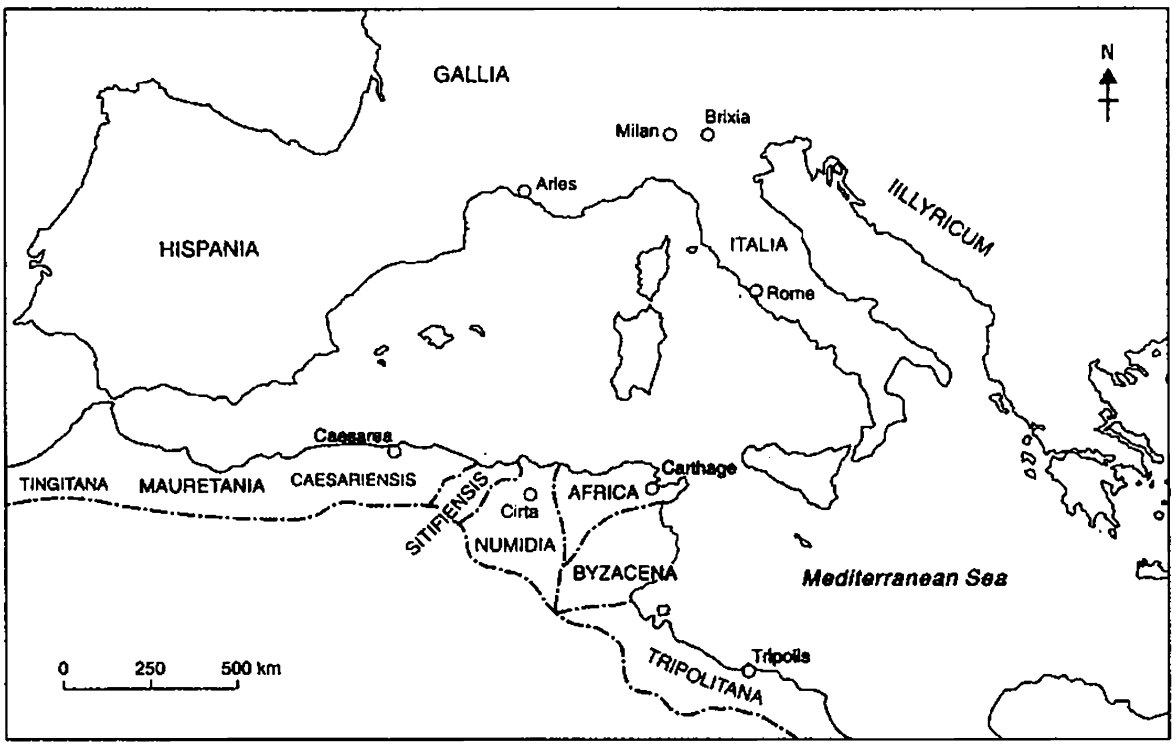
[61] Eusebius, *VC*, i. 45. 2.

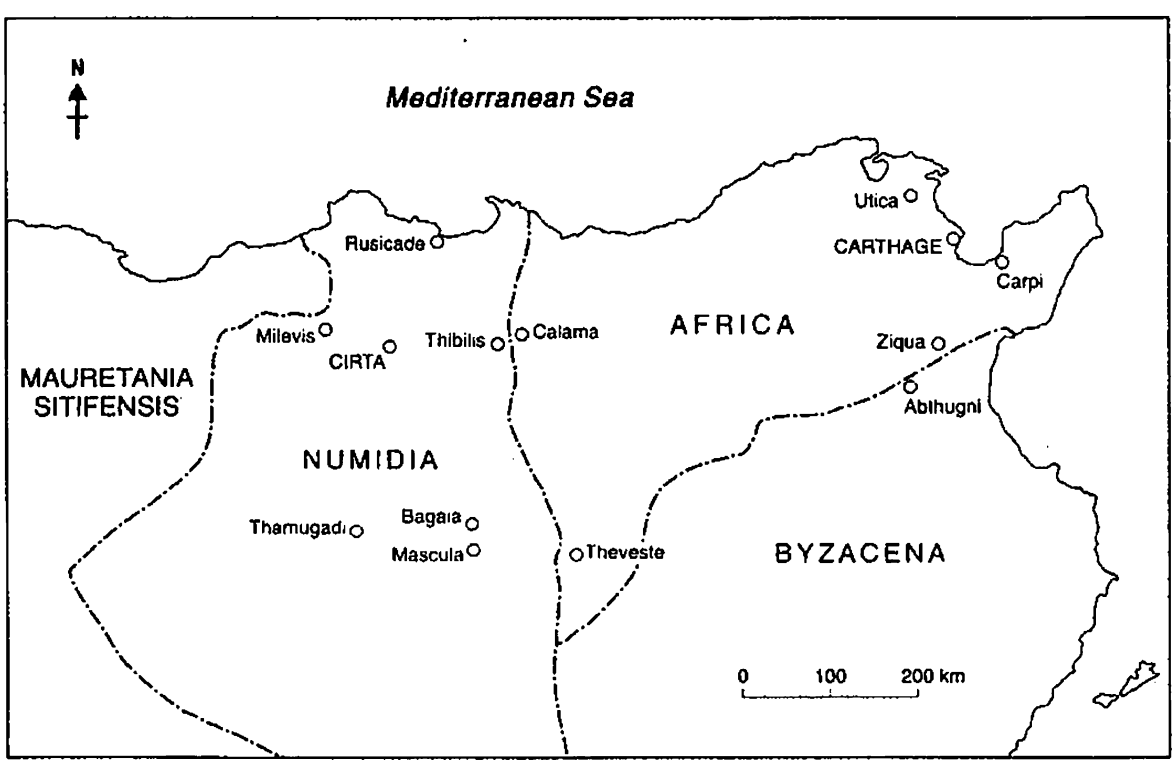
[62] *Sermo de passiones sancti Donati episcope Abiocalensis*, 8 (Maier, 28): Cum omnis aetas et sexus clausis admodum oculis caesa in media basilica necaretur: basilica, inquam, intra cuius parietes et occisa et sepulta sunt corpora numerosa…

[63] しかしその後、この問題は互いの正統性を証明するための題材へと変質し、その重要性は次第に高くなっていく。両教会の間に生じた秘蹟論争を示す史料の数が時代を経るにつれて増加しているのは、まさにその証左でなかろうか。セクンドゥスとカエキリアヌスとの間における秘蹟論争を記述した史料は少なくとも現存していないが、4世紀中葉になるとパルメニアヌスとオプタトゥスとの間の論争を示す史料が現れ、ペティリアヌスとアウグスティヌスとの論争に至ってはその史料が大幅に増加している。アウグスティヌスの時代になると両教会は教会分裂の根本的原因を忘れてしまったかもしれない。

[64] Jones, *Constantine and the Conversion of Europe*, p. 91; Frend, *The Donatist Church*, p. 145; 新田一郎「ドナティズム運動に関する一考察—セクト運動の性格と意義—」、11-12頁。

[65] 例えばBrownや後藤氏など。Brownは、帝国とカトリックとの結びつきを、コンスタンティヌスの片務的なパトロネジとみなしている。Brown, *op. cit.*, pp. 255-257.





(上図) ディオクレティアヌス以降の北アフリカ

(下図) アフリカ州とヌミディア州

[Edwards, M. (ed.), *Against the Donatists*, Liverpool, 1997, p. 221 より引用]